



絵本

フェデリコ・ガルシア・ロルカ 子どもの心をもった詩人

文：イアン・ギブソン 絵：ハビエル・サバラ 訳：平井うらら



■影書房
■2018年6月刊
■定価 2,200円+税

20世紀スペインが生んだ不世出の詩人で劇作家、フェデリコ・ガルシア・ロルカ(1898年～1936年)について、もう一度おさらいをしたい。今からちょうど82年前の1936年7月17日、北アフリカのモロッコでクーデターが勃発した。翌日、それを合図に、スペイン本土の約50ヶ所の陸軍駐屯地で一斉に軍事叛乱が起こった。このような場合、丸腰の民衆は武装した軍隊に跪くより方法がない。ところが、数日中に、マドリッド、バルセロナ、そしてバレンシアの3大都市の軍駐屯地の軍事叛乱は、命懸けの民衆の武力抵抗によって鎮圧されてしまう。クーデターの失敗で内戦が始まったのだ。この時点で、市井の民衆側は、叛乱軍に対して、屈辱的な隷属よりも果敢な抵抗による「内戦」を、さらにはより良き社会を建設しようとする「革命」を選んだのだ。ここに、2年9ヶ月におよぶスペイン内戦の「原風景」があったと言える。

さてロルカは、内戦勃発のほぼ1ヶ月後の8

月19日払暁に逮捕され、グラナダ郊外ビスナル村の「大なる泉」のそばで、バルデス知事が雇った暗殺集団「黒部隊」によって銃殺された。彼の遺体は近くのオリーブ畑の脇に放置された。彼は、なんと37歳という若さであった。

まるで流れ弾による不慮の事故死のようである。

内戦の勝利者フランコ將軍は、ロルカの肉体とその分身である作品すべてを地上から消し去ろうとしたのだ。果せるかなというべきか、現在に至っても彼の遺骨は見つからないのである。

本書は、長年ロルカを研究し、彼の生涯を再現した評伝『ロルカ』(邦訳、中央公論社、1997年)を出版したアイルランドの詩人、イアン・ギブソンがロルカの生涯をスペインの子どもたちでもわかるように、やさしい言葉で書き、そのテキストに見合うように画家のハビエル・サラバが絵を描き、詩人の平井うらが翻訳

(日西対訳)した、実にユニークな絵本である。本書に収録されている「日本の子どもたちへ」というエッセイでは、ロルカが20歳くらいの時の作品で、われわれ日本人にとっても懐かしい水田やサギが出てくる「神道(SINTO)」という不思議な詩を紹介している。

神道

金の鈴鐘。 龍の仏塔。

チリン、チリン、 水田の上を。

太古の泉。 真理の泉。

遠くに、 バラ色のサギが数羽

そして 静まりかえった火山。

(本書p.47より)

また本書巻末の、イアン・ギブソンによる評伝を活用した「ロルカミニ事典」では、詩人の暗殺を含む社会的背景、さらに詩人の全体像を詳らかにしている。これからロルカを学ぶ者の入門書としては、最適である。

歴史

スペイン内戦(一九三六～三九)と現在

著者：川成洋・渡辺雅哉・久保隆 編



■ぼる出版
■2018年6月刊
■定価 5,800円+税

川成 洋
Yo Kawanari
1942年札幌で生まれる。北海道大学文学部卒業。東京都立大学大学院修士課程修了。社会学博士(一橋大学)。法政大学名誉教授。スペイン現代史学会会長、武道家(合気道6段、杖道3段、居合道4段)。書評家。主要著書『青春のスペイン戦争』(中公新書)、『すべて』(彩流社)、『スペイン-歴史の旅』(人間社)、『ジャック白井と国際旅団-スペイン内戦を戦った日本人』(中公文庫)他。

スペイン内戦は、82年前の事件である。内戦期あるいは内戦直後から1975年まで続いたフランコ独裁政権期に、フランコ側に拉致・惨殺された夥しい犠牲者の遺骨の発掘・収集などが未完のままである点を除けば、内戦自体はすでに風化していると言える。

それにも、内戦の中で闘われた争点は、われわれの記憶にまだまだ鮮明である。とりわけ内戦をテーマにした文学作品にそれらを求めることができる。

ちなみに、我が国で翻訳出版されている作品を挙げると、ヘミングウェイの『誰がために鐘が鳴る』(1940)、アンドレ・マルローの『希望』(1937)、ジョージ・オーウェルの『カタロニア讃歌』(1938)、アーサー・ケストラーの『スペインの遺書』(1937)、ジョン・ド・パスの『ある青年の冒険』(1939)、ジョルジュ・ベルナノスの『月下の大墓地』(1937)、それに『星の王子さま』を書いたサン＝テグジュペリの『人生に意味を』(1956)『人間の土地』(1939)『城砦』(1948)などであろうか。こうした作家たちは、共和国軍の戦列で戦う義勇兵、あるいは本国にニュースを送る戦場ジャーナリストとして参加していたのであり、おしなべて「文学と政治」という二元論的対立の超克への驚くべき実践的努力がうかがわれる。それは別言すれば、個人的な倫理観

や世界観に基づく政治参加である。こうした状況に置かれながらも、彼らが内戦期に体験せざるをえなかった、社会主義国ソ連による同盟国であるスペイン共和国への軍事援助と醜悪な政治的支配権の確立、それも非人間的で残酷な政治的粛清をも含む恐怖政治社会に対して、こうした作家たちは厳しい姿勢で批判し、その事実を毅然と公表したのだ。

余談になるが、かつてアメリカの雑誌に、「日本の思想的状況は、日本人がスペインの内戦を知らなかったことから大きな影響を受けている。つまり、これこそ、戦後民主主義がきわめて脆弱となっている要因なのだ」というある評論家の意見を読んだことがあったが、彼は日本の知識人が、スペイン内戦への参加から得られたような複雑な体験を得ずして、ただ進歩的、左翼的な視座から甘い評価や意味付けをしてしまっている点を指摘していたのかもしれない。こうした日本人の知識人の甘さが、ともすれば、彼らの社会参加、政治参加に関して不決断の核心に通底していると言いたかったのだろうか。

本書は、スペイン内戦勃発80周年を記念して、もう一度この内戦を記録しておこうと、あらゆる分野からの論考を記録したものである。全体で64本、うち、スペイン人はもちろん、フランス人、カナダ人、ドイツ人、アメリカ人

研究者や作家、あるいは活動家・実践家の論考は17本。本書の編集に関して、決して自慢するわけではないが、我が国で出版されている「外国史」あるいは「外国文学」関係書では、日本人だけの執筆陣で原稿をかき集めて編集しているのが通例である。つまり、本書にあるようなその当該国の研究者の「生の見解」が残念ながら皆無なのである。こうした状況について、これでいいのだろうか、という印象を持っていることを表明しておきたい。

本書は、I、スペイン内戦への道、II、スペイン内戦の諸相、III、スペイン内戦と世界、IV、スペイン人たちのスペイン内戦、V、アナキズムとスペイン内戦、の5章立てである。特徴を挙げるなら、よく見かける無味乾燥な「スペイン内戦」歴史書と異なり、文学、映画、美術、音楽、食生活、絵画、写真など、あらゆる分野における人間生活を詳らかにしている点であろう。また我が国ではほぼ等閑視されてきた、軍部のクーデターを粉砕し、内戦へと展開していくプロセスに重大な役割を果たした果敢なる失敗と惨憺たる成功というべきアナキストの活動や生きざまについて、最後の章でまとめているが、これこそ本書の白眉というべきであろう。

自著を語る